

大塚素小論

—その生涯と思想—

室田保夫

はじめに

- 一、その出自と同志社
 - 二、北海道釧路集治監監教諭師
 - 三、米 国 遊 学
 - 四、帰国—同志社幹事
 - 五、キリスト教青年会
 - 六、「満州」の地で—満鉄事業
 - 七、その 落 日
- おわりに

はじめに

筆者は以前「キリスト教監獄改良の思想」(『基督教社会福祉学研究』一一号)という論文の中で、大塚素(一八六八—一九二〇)につき若干ながら論じたことがある。大塚素は明治二〇年代、原胤昭、大井上輝前や留岡幸助、牧野虎次

らと共に、北海道集治監の教誨師となり、「遊廓」の問題とともに近代日本の「二大暗黒」（社会問題）と称された「監獄」の改良事業に情熱を燃やした、いわゆる「北海道バンド」の一員である。これらの人々は当時、劣悪な状況の許に置かれていた囚徒達に対し、教誨と伝道を通して精神的な面のみならず環境の改善を計り種々援助し、日本の監獄改良の先駆者として名を残した人々であり、加えて社会事業の開拓者としても重要な位置を占めることになる。しかしこの「北海道バンド」の中でも大塚は留岡や原に比し、研究がほとんど為されていない一人である。

大塚素は、苦学し同志社で学んだのち、一八九二年、北海道釧路集治監の教誨師として渡道し、三年間斯業に従事する。そして単身米国に渡り、五年間、勉学と種々の修業を経て、一九〇〇年三月帰国する。その後母校同志社の幹事兼教授を拝命し教育界で働き、一九〇五年からは江原素六の懇請を受け、キリスト教青年会の本部に入る。一九〇九年からは南満州鉄道株式会社に入社し、主に旧「満州」（現在の中国東北部―以下「満州」）での社会事業に従事する。いわばこれが大塚の畢生の事業であったわけだが、しかし一九二〇（大正九）年八月四日、病の爲め突然昇天したのである。享年五二歳であった。

この小論ではかかる経歴を持った大塚が北海道バンドの一員として北の辺境の地で過ごした後、いかなるキリスト者として生を相渉っていったのかをみていくことにする。とりわけ最後は植民地での社会事業という近代日本のいわば陰面の構造の中で彼は一体何の爲めにそして何に想いを馳せたのか、興味を覚えるものである。したがって大塚の研究は社会事業史は勿論、キリスト教史とりわけ「満州」（植民地）の問題との相関の下で考察されていかねばならない課題でもある。しかし本稿でさし当って大塚素についてその生涯を瞥見し、彼の足跡と思想を略叙していくことを所期の目的としておきたい。彼は満鉄の社員時代、当地の邦人新聞『満州日々新聞』にも書いていたようだし、彼の重要な満鉄時代については別稿で詳論したい。

一、その出自と同志社

尾見薫記すところの「略歴」によれば、大塚素(右金次)は一八六八(明治元)年二月一日、愛知県幡豆郡西尾町に生まれており、号は鑿堂である。家は歴代西尾藩に属し、父は素吉、母はカナ子であり二男二女の長男であった。父は当時より「人格の人」として、藩士の敬懼するところであり、素も幼年より藩儒の筒井秋水翁の塾に入り、薫陶を受けた。幼少年時より大塚には「神童」の誉れ高く、一〇歳の時、明治天皇行幸の折、「御前講書」の榮譽を受ける予定があり、これは都合により中止となったけれども、かかるエピソードも当時の彼の成績の優秀さを例証するものと言えよう。しかし一八七九(明治一二)年二月四日、父は四二歳にて死去する。これによって大塚一家の扶養の責任は一二歳の彼の双肩に掛かることになる。彼は塾を出て小学校の教師となり、一家を支えるために刻苦勉勵の生活を送るが、三年後の八二年七月五日に、今度は母を失うことになる。かくして大塚家は波乱怒濤の境遇に置かれることになり、彼は幼き弟妹を養いながら教鞭を執り生計を立てていたのである。

ところで大塚は「略歴」によれば、一九歳の時、「キリスト教に入る」と記されているが、彼が如何なる経緯で以て回心したのか、また影響を与えた人物や教会等も全く不明の状況にあると言わざるを得ない。そして二〇歳の時、新島襄の同志社に入学すべく筈を負って上洛することになる。大塚が何故に同志社に青雲の志を向けたかに就ては推測の域を出ないけれども、キリスト者としての自覚、そして当時の新島襄の同志社の存在を指摘でき得るであろう。ともあれこうして苦学生として同志社で学ぶことになる。入学の時期は一八八七(明治二〇)年九月と推定され、コースは五年間の普通科である。

大塚の同志社時代を記すに當つて、さし當つてその同級生であつた牧野虎次の思い出から見てみることにしよう。「大塚君、君と僕と相識り始めたのは、実に明治二十年の秋、御互に同志社英学校に入学した當時からである。級を俱にし、一所に洗礼の志願をして、四十七名の同志と俱に公会堂の壇上で、生涯忘るゝ事の出来ない聖典を授かつたのは、明治二十年十二月十八日であつた⁽²⁾」。このように大塚は同志社に入学したその年の暮れに、牧野らとともに洗礼を受けることになる。教会は同志社教会である。当時大塚は「小愛を以て斯道を謬る勿れ 小愛もと斯道の真に非ず 請う見よ二千余年の昔 毅然襟につく一神人⁽³⁾」というような詩を残したようである。

勿論当時、新島は健在でとりわけ入学の翌年の秋には「同志社大学設立の旨意」を公表し、江湖の識者の耳目を時たしめていた。その教育理念「一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、是等の人民へ一国の良心とも謂ふ可き人々なり、而して吾人へ即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す⁽⁴⁾」、実に新島はこれを「国家百年の大計」の宿志としていたのである。この新島の警咳に接せられたのも彼の生涯にとつて大なる幸福だったと言えようか。また当時、デビス、ラーネッド、小崎弘道、柏木義円らとの先輩・恩師、また牧野を初め、西村清雄、山本徳尚、山室軍平、吉田清太郎、留岡幸助ら多くの学友に恵まれていたことも彼の生涯を豊かにした大きな要因であつたと評し得よう⁽⁵⁾。そして明治二〇年代初期の同志社には、例えば石井十次の岡山孤児院との關係に窺えるように社会事業の一つを取つても確かに精神があり、情熱があつた⁽⁶⁾。

しかし当然、大塚の学生生活は苦学の連続であつた。故郷には弟妹を残していた訳だし、その生活費を調達していくことに窮していたようである。この件に関して牧野は「私〔牧野〕と同じ様に掃除番を勤めて居たが、或る時不図、彼の部屋をのぞいた処、彼は郵便貯金帳を前にし乍ら、固い食パンをかじつて居た。ドウしたのかと聞くと、郵便貯

金がダンダン少くなるので、弟妹の行先が気になり、この頃、食堂での食料を節約し、パンをかじって飢を凌いで居るのだとのことであつた⁽⁷⁾と当時を偲んでいる。

また同志社時代共に学んだ三輪源造は大塚を「その頃まだ残つて居た志士風の青年で、寧ろ保守的傾向のある人と感じられました。外面極めて温和で、然も裏には随分激しい感情を持つて居たのを認めました。そうして慷慨家の倂を見ました。日々その生活は規則正しくて、倫理的で余程自制心が強かつたやうに思われました。……略……私は君を思ふ毎に新島先生を連想します。実に君は先生を敬慕し、先生に最も倣ほうとした一人です。どちらかといふと小い方の君の体格は先生と比較が出来ない程異つて居るし、容貌もすつかり違つて居るのに、何だか君は先生と似て居ると感ぜざるを得ないのです」と評し、そして「其当時の記憶は可なりはつきりして居ります。窓の外の野梅に鳴く鶯と一緒に賞した事もありました。君は漢詩に、私は和歌に、趣味は多少異なつて居りましたが、それでも文学に対する愛好は同じようでした」(『人道』一八三号)と大塚を回顧している。大塚は生涯夥しい程の漢詩を残しているが、同志社学生時代より文学的才能を發揮していたことが窺える。ともあれこうして大塚は生活苦と闘いながらも、五年間の学窓生活を同志社で送ることになる。在学中に尊崇する新島の昇天に遭遇することになったが、この時代に彼の思想の原基なるものが形成されたと言えよう。

二、北海道釧路集治監教誨師

大塚は一八九二(明治二五)年六月、同志社を卒業する。彼の「日誌」⁽⁸⁾によれば、七月中旬、小崎校長より呼ばれ、北海道の原胤昭より空知と釧路の二ヶ所に教誨師を要請する書簡を紹介されている。当時の彼の日誌には「小崎校長

より示されし原氏の手紙の趣を直に新島夫人に告げ、他の諸友にも告げしに、皆々余の爲めに喜びを表し呉れぬ、また七月二一日の段には「独り車を馳せて若王寺山に上り、須臾山上に黙禱し、先生の墓に告別して降り、十一時頃漸く荷物を立派に行季に納めんとせり、夫人手づから之を助け、且つ先生の召されしシャツ、パッチを贈はる」とあり、一種の使命感、覚悟の上での渡北であることが窺える。そして大塚は東上し多くの友人、名士に会つてゐる。周知のようにこの時期北海道の各集治監には原胤昭以外、山本徳尚、留岡幸助ら同志社の先輩が教誨師として赴任し着実な成果を果たしており、そしてその中心的人物が大井上輝前であつた。八月八日、大塚は東京にて大井上を訪れてゐる。しかし「大井上氏を対山館に訪ふ、昨日帰途に上られしとの事なり、豈遺憾なしとせんや、唯一頓挫に逢ふ毎に、一倍意気の昂騰し来るを覚ゆ」と認めてゐるよう實際は面晤出来なかつたが北海行きの覚悟を増幅させることになる。九月一六日横浜港を解纜し、二〇日小樽に着し、そして二一日には留岡と海老名弾正に会い、二三日に大井上に邂逅してゐる。こうして大塚は北海道に赴任し、「石田を耕す」とも形容された極めて困難な監獄改良事業に飛び込んでいくことになる。

さて、一〇月一日の日誌には「留岡氏早朝に來られ、札幌にて典獄に逢ひ、余の事を話したれば典獄は大賛成なれば、釧路に周旋すべしと言はれたれば、多分其通りに相成るべし」とあり、大塚の赴任先は釧路となる。一〇月九日の日誌には月給が二〇円であることに触れ「自家の価値は此給料にて定められしにあらず、唯神の爲めに國のために平生学び得し所を以て、可憐なる囚徒に教ふるなれば行くことに決せん」と述べ、次のように祈念してゐる。

神よ願くは任重き此幼児を憐み給へ、若し神の助けを得ば如何なる大事にても成し得べしと信するなり。余は決して饑渴屈辱を怕れて不義の金を取らざるべし、況んや金錢の奴隷たらんや、余が行くは皇天上帝の命あり官府の命に非らざるなり。嗚呼、神は氣鋭にして満ち易き者を大成せしめんが爲めに、数々氣を挫きて其志を練らしめ給へり、嘗むべき哉、神余が前途は多望なり、神よ願くは聖意に適ふ器となして用ひ給へ

大塚は二〇月二四日、湧頃別から標茶に着し、原胤昭と共に釧路集治監を訪れている。そして原の教誨を傍聴し「余は狎れぬ事として見聞するもの悲壯の観ならざるなければ、精神鬱々たるを免がれず、時に悚然として満身寒栗を發せり」と感想を記している。

ところでこの釧路集治監は一八八五（明治一八）年に設置され大井上が初代典獄に就き、一八九二年八月一七日からは四代目の典獄として八田哉明が就任していた。⁽¹⁰⁾ 樺戸に政治犯が多かったのに比し、主に軍人、軍属、元巡查等の軍事犯の集禁が為されていたようである。この釧路集治監には一八八八（明治二二）年四月から原胤昭が教誨師として赴任し、周知のように原は教誨事業の傍ら、硫黄山の囚人労働の廃止や「釧路出獄人保護会社」の設立、樺戸に移ってからは『獄事叢書』の刊行等多くの業績を挙げ、キリスト教教誨師の中心的存在であった。九一年七月に釧路分監となったが原は九二年一二月、樺戸の本監に栄転するので大塚は暫らくではあるが原と同じ釧路で働いている。また生涯の畏友とも称せる有馬四郎助も当時網走分監長として働いていた。かかる中で大塚は九五年八月退職するまで、約三年間教誨師としての生活を送るのである。

教誨師時代の大家については別稿に譲るところでは一八九三年一月七、八日の両日、樺戸で開催された北海道集治監教誨師諮問会について若干みておくことにしよう。この会に集まったのは大塚（釧路標茶）の外、原胤昭・水崎基一（樺戸）、留岡幸助・末吉保造（空知）、阿部政恒（網走）、中江汪（帯広）の合計七人である。典獄・大井上輝前から教誨の方法・技術・監獄敷地内の環境やその影響、囚者の読書等々一四の問題につき諮問があった。例えば総囚教誨について、大塚は「啻に有益のみならず最も必要なるものなり」と断じ「夫れ一家には一家に関する出来事あり、一国には一国に関する出来事あり、而して一家一国各時に因て或る氣風を生ずることあれば、此事に関し総囚に教誨を施すの必獄には一監獄に関する出来事あり、又時に依り或氣風或傾向を生ずることあれば、此事に関し総囚に教誨を施すの必

要なることは司獄官の齊しく認むる所なるべし」とと総囚教誨の意義について開陳している。⁽¹²⁾ また当時の『基督教新聞』には同月二一日に、この会議に参集したのを機会に市来知において大塚と阿部の演説会が開催され、「同夜の司會者は塩見孝二郎氏にて留岡幸助氏開会の趣旨を述べ夫より大塚、阿部の二氏順次登壇して演説せられたり聴衆殆んど百名許りにして頗ぶる敬聴したる有様なりき其後の評判も非常に好き方なれば察する所今回の演説会は大に人心を警醒せりと思はる」と報じられている。

このように渡北した大塚は日々監獄の教誨師として在監者と生活を共にし、伝道活動とともに日本の監獄改良のため他の同志と粉骨碎身の努力をしていくわけだが、一方、『獄事叢書』、『教誨叢書』等に論稿を発表していく。例えば『獄事叢書』八号(一八九四年一月三日)に「秋風颯々」という小論がある。この中で大塚は「蓋し監獄の事業は、運、猶草創に属して、磐根錯節、利刃を要するものゝみなり。新進氣鋭の士、奮励一番、身を投じて死なずんば、我國の監獄、意に其目的を達するの時なきなり」と覚悟を披瀝し、「男児一たび死する、宜く此の如くなるべしと、己にして曰く、男児の死所、豈に翹硝煙彈雨の間のみならんやと。嗚呼一千の兵士、猶敵に向て馳せ以て其兵士たるの職分を尽くしたる、此の氣此の魄、千載我邦を護て愛国者の涙を促がす者、是れ千万人の等しく学ぶべき所、殊に平和的戦争に従事して其の鎮撫平定の任にあたる者、年頭須臾も忘るゝ可からざる。氣鋭新進の我党諸子、抑も以て如何となす」、そして末尾に「平壤の勝戦を聞くの日稿す」とあり、日清戦争時、自ら己が「平和的戦争」に当る者の覚悟を認めている。

ところで大塚は一八九四(明治二七)年一月二十九日より、翌年三月二十九日にかけて、有馬四郎助に対して新約聖書の第二福音書にあたる『マルコ伝』の注解を章ごとに纏めて郵送するという大変な仕事をする。この大塚の情熱が当時「鬼分監長」の名を轟かせていた有馬を信仰に結びつけることになる。大塚のこの事業の発端には囚徒を教化す

るには、その責任者とも称せる「分監長」をしてキリスト教に導くことの必要を持論として持っていたことによると推察される。ちなみにこの書簡集は後に『友愛』として出版されることになるが、有馬はその巻頭に次のように記している。

明治二十七年の暮より二十八年の春に至るの間、友人大塚兄身銚路分監教誨師の激務にあり乍寸暇に乗して小生の為めに此講義を記送せらる、所説懇切言々友愛の熱情より出つ、頑鈍の心感動せざる能はず是れ小生か天恩裕かなる無限生命を享受するに至る初階たりし也、今に於て之を顧みれば唯た感激あるのみ、嗚呼友情の熱 此冊子となる、蓋し友愛の名ある所以也。

明治三十四年九月於病床記之

四郎助

以下、『友愛』の内容について若干ながら立ち入っておくことにしよう。

第一便は「明治二十七年一月二十九日一時四十分書き了る」とあり、「馬可伝第一章」の注釈である。その冒頭は「福音」であり「福音といふこと初めに何の事か十分に分り申すましくと存候これハ後に十分の意味相分り可申と存候我々か神を知り、神と我との關係を知り人たるの幸を須く感するを得るに至るはキリストの御蔭なれハ茲ニ至て福音の福音たることを知了することを得ることに候小弟ハ兄か遂に成程福音なりと合照する時の速かに至らむことを願ふなり」とある。

第二章の書出しは「兄よ、弟ハ此企てをなせし事を喜び申候弟の年ハ閑なき閑を見付けて動かんといたし申候、不完全なる此解釈かオポロにても至聖至大なる神人の俤を兄の心に印せしめなハ弟か喜びハ如何なるへきぞ、今暫ク弟をして兄と共に祈らしめよ」と記し、次のように認めている。

吾等の父なる神よ、今二人の者心を合せて祈る、願くは其祈りを聴き給へ、我等は父より恵まれて最と大なる最と聖き職分を命せられぬ、同じ御手にて送られし同胞の御前を遠かり人の道を離れたる者を其本に復らしめんとの望を以て働くことは最も幸福なるを感謝する所なり、一面に此事を望めども先づ我等の御姿に有ることを求めされハ折角授けられし職分も仇になりぬへし、

今暫く共に聖書を研究するハ其奥義を悟て天職に答へんか為めなり最も小き地にある二人の兄弟の微志を憐ミ天よりの助けを与へ給へアーメン

このように寸暇を惜しんで時には睡魔と戦いながら、有馬に対してキリスト教を伝道し、福音を伝えようとする仕事は、本業の教誨師の仕事の延長上に位置していたことは疑いを得ない。ここにキリスト教教誨師としての面目躍如なるものがあるのだ。各章の最初或は最後に大塚の私的な想い、感想などが認められており、至愛の情が察知でき得る。第一章の筆頭は次のように書かれている。

天地ノ主ナル父ヨ、願クハ我等ノ心ヲ開キ我等ノ心ヲ平ニシ天地ノ大道ニ從ヒ得ル様我等ヲ祝シ玉ヘ、天地ノ間ニ生ラ慕ケテ案ジク今日ニ至リシヲ感謝シ奉ル、我等カ一片ノ心ハ向後唯神ノ国ヲ建ツル人夫トナリテ斃ル、マテ働クノ決心ナレハ我等カ誤ナキ生涯ヲナシ得ル様導キ玉ヘ善ク勉メテ働イタト人ヨリニアラス神ヨリ言ハレタガ一杯ニ我職分ト思フ所ニ尽クシツ、アレバ我儕ガ脆弱ナル肉体ヲ憐ミ終リニ至ルマテ守リ玉ヘ、神ヲ離レテハ我ハ何ヨリモ弱ハク生キテ居ル価値モ望モナキモノナリ、今神ノ子ノ言行ヲ見ントスルニ方リ我等ヲ心清ク眼明カナラシメ玉ヘ我等ハ今我カ生命ニ関シテ研究セントス神ヨ願クハ憐ミ玉ヘ

そしてこの書簡集の最後を「茲ニ大胆ナル不遜ナル企モ竟ニ終ヲ全フセリ、小弟ヲシテ謹テ神ニ感謝ヲ捧ケシメヨ、願クハ兄弟ニ心ヲ合セラレンコトヲ」として次のように書いている。

全能全智ニシテ此宇宙ヲ支配シ我等人類ヲ愛シ玉フ真ノ神ヨ、私ハ今愛スル兄弟ト御前ニ一片ノ感謝ヲ捧ゲ奉ル、私今アナタノ御恵ミニ因テ此愛スル兄弟ヲ得シコトヲ第一ニ謝シ奉ル、蚤ク父母ヲ失テ世ニ頼リ少ナキ私ハ格別ナル御恵ヲ蒙リテ良キ多クノ兄弟ヲ与ヘラレ共ニ相愛シテ此世ニ立チ共ニ相助ケテ此世ヲ御心ニ合フ国トナサンカ為メニ働クコトヲ深く謝シ奉ル、天地ノ主ナル父ヨ浩々タル宇宙ノ間ニ在テ私ハ幸ニ早ク真ノ道ヲ聴クコトヲ得御前ニ心ヲ被キ心ニ光ヲ与ヘラレアナタニ父トシテ事アルノ喜ヒト幸福トヲ享ケタレハ同シ喜ヒト幸福ニ与ラント身ノ程ヲ忘レテ愛スル兄弟ノ為メニ我等ノ救主ノ御一代ノ大略ヲ研究スルコトヲ数月前ニ企テシニ私ノ肉体ノ弱キニ係ラス智識ノ浅薄粗笨ナルニ関セス兎モ角モ殆ント予定ノ時ヲ以テ今夕茲ニ其終リヲナスコトヲ得タレハ謹テアナタノ御恵ヲ感謝シ奉ル、願クハ私ノ如キ卑キ心ヲ以テ我救主ヲ誤テ揣摩シ輕キ筆ヲ以テ崇重ナル事實ヲ汚シ兄弟ヲ誤リシ條々ハ聖靈ノ御力ヲ以テ兄弟ノ心ヨリ消ヘ去ラシメ少シニテモ御心ニ合フ所アラハ之レヲ其心ニ銘セシ

メ兄弟ヲシテ其レニ由テ益御前ニ近クコトヲ得共ニ信仰ノ道ニ進ミ同シク直接ニ御感化ヲ受クルコトヲ得セシメ玉ヘ兄弟相互ニ助ケ勵マシ此ノ逆風濁浪ノ荒ル、社会ニ共ニ寸心ヲ尽クサント、其為メニ聊研究セシ馬可伝ノ十六章ハ神ヨ之レヲ無益トナスコトナカラシメ玉ヘ今業ヲ卒ヘタル感謝ト共ニ私ノ心ニ願フ所ヲ御前ニ申シヌ願クハ兄弟カ心ニ願フ所アラバ併セテ基督ノ名ノ為メニ聴カセ玉ヘ、神ノ榮光世々限りナクアレ、アーメン

そして「兄ヨ、山紫水明ノ処、共ニ聖書ヲ研究スルノ希望ハ空シクナリトハイヘ何時カ何処カデ心静カニ福音ノ語ヲナスノ機会可有之弟ハ兄カ杜撰粗茶ナル而モ蠅頭字ノ筆記ヲ何時モ喜テ讀ミ給ヒシコトヲ茲ニ多謝シ奉ル、一冊ノ聖書意味深重、基督ノ御生涯ハ仰ケハ愈高キヲ覺フ、願クハ兄ヲ得ラレシ所ヲ以テ時々弟ヲ啓発シ給ハシコトヲ、今夜モ亦一時ヲ先キ程ニ聴キシ時トナリタレハ茲ニ擱筆可仕候」と認めてゐる。總じて大塚のこの「講義」は十分に聖書学や神学を學んだわけではなく、彼独特の解釈もある。しかし逆に素人的解釈があるが故に情熱が増幅するものとなつてゐるといえようか。

かかる大塚の情熱に應えてというか、天父の慈悲と形容しようか、有馬は後日すなわち一八九八年五月一日靈南坂教会で留岡より洗礼を受けることになる。そして有馬は横浜家庭学園の創設に窺えるように生涯、キリスト者として監獄改良や社会事業に貢献していくことになり、そして多くの人々を信仰に導くことになるのである。

ところでこの大塚の友情に対して有馬とともに同級生であつた牧野虎次も『針の穴から』や『人道』等において思ひ出を書いており、また牧野との友情も彼が十勝の分監に赴任した当時より更に深まることになる。例えば九五五年五月、牧野の官舎が焼失した時、大塚は次のような漢詩を牧野に惠与して慰撫したといふ。⁽¹⁵⁾

大塚素小論
泣拜乙未五月詔 熱血墮兮冷汗流 請君休説外交事 無辺感慨使人愁 寒煙長迷遼東野 愁雲未收韓山秋 屈腰三国雖可愧 震威八紘豈無籌 千金投去買宝剑 他日誓欲斬蛟虬 勤儉從來伴雄略 驕縱自古誤鴻猷 君不見我邦前途千里遠 發憤任責在我儔 石心可磨南窓下 鉄骨宜鍛北海陬 健馬揮鞭試馳突 嚴冬猶是汗霑裘 拭汗勤懃一願晒 天地偉觀在寸眸 帰来悠々剔灯火 沈

思独坐読書樓 情懷是時清於水 塵紛何會引心憂 落々胸襟吞宇宙 一道靈氣入玄幽 回首虛榮如糞土 悟來人生是蜉蝣 聞說
吾兄罹災厄 器用大半委秦箒 天意甚深豈易測 人為多失不可尤 青年合味辛酸味 不啻辛酸氣易浮 赤誠尤要艱難日 歷尺艱
難志始修 盤根到頭分利鈍 苦楚畢竟判剛柔 喜君平心如渤海 欽他豪氣凌斗牛 噫男兒一心期報國 衣服器用奚為求 勤君丹
心一片淨裸々 信步橫行六大洲

牧野はこれを「家宝の什器」として爾來珍藏していると述懐しているが、ここでも大塚の温かい人柄が察知できよう。

さて大塚の尊敬した先輩でもある留岡は、九四年五月、監獄事業、感化事業視察の爲め、米國に遊学の旅に出る。これに刺激されてか大塚も米國行きの希望を抱き九五年八月辭職することになる。しかし渡米に対して問題は留岡と同様、資金を如何に調達するかである。これに関し大塚は一八九五（明治二八）年一〇月一日、旧藩主の子爵・松平乗承に米國行の旅費を懇願する書簡を認めることになるのである。当時の彼の渡米の思念が奈辺にあつたかを知るためにもその丹心を披瀝した書簡の一節を瞥見しておくことにしよう。

……前略……抑も素が今後志す所は監獄事業の研究にあり、此事業の我邦に於ける兩三年来其真面目の改むるものありと雖も、猶未だ幼稚たるを免かれず、八方無告の民、何を以てか之を聖明の治に浴せしめん、同じく生を此山水秀麗なる帝國に稟けたる同胞にして、身を幽窓鉄鎖の間に置く、誰か之を見て一片憐愛の情ならんや、況んや年々國帑四百万を費やす此事業決して少ならず、豈に志士が一顧に値せずとせんや、私かに以為らく此事業未だ深く世人の注意を惹くに至らずと雖も、國運の消長に關するものありと存すと。平生の知己朋友其志を賛し、其凶を翼け、為めに資を損て、征途に上らしむ、去八月中旬北海の寓居を離れしより、殆んど五十有余日、節約頗る努めしと雖も、其間費す処少なからず、且つ少しく旅装を要する所ありしを以て、今囊中饒す所僅かに一百四十金、素豈に敢て普通の洋行者流に倣ひ、首途を美にし行途を壯にするを望まんや。実に我が先師新島襄先生が、我邦幕末多難の日に際し、憂國の誠を抱いて海外の形勢を究めんと欲し、一劍奮然、死生を賭し、國禁を犯し、函館港頭身を米國の商船に託せられし當時の事、歴々素が心にあり、遺烈言々滅すべからず、素の不肖を以てすと雖も一念此に到る毎に、未だ曾て慨然興起せずんばあらざるなり。

大塚にとって近代日本の暗黒の一つ、「監獄」は「同朋」救済への事業であるとともに「國運の消長」にかかわる重

要な課題として把握されていることにも注目せねばならない。そして新島の函館脱出にも似せた憂国の心境に捉われ、監獄改良という近代日本の悲願とも言える一大事業に想いを馳せ、米国に渡っていくのである。

三、米 国 遊 学

大塚は教誨師として三年間働いた後、後任を同志社の後輩でもある水崎基一に譲り、渡米する。時は一八九五（明治二八）年一月七日のことである。この間の様子については大塚の日記が残されており、それによって知ることが出来る。¹⁹⁾「夕陽紅処富岳明なり、同船のもの之を拜して涙下るものあり、『大和魂』『大勝利』『サヨナラ』等の語を以て横浜を発す」。二四日、サンフランシスコに着し、三一日、シカゴに到着するのである。そして九六（明治二九）年一月二日、留岡に逢い、旧交を温め、そして一七日の日記には次のように認めている。

初めてスマート家に入りて、クツクとなる。

我等は我等の世界に就て考へねばならぬ、多くを有す。此世界は喜んで渡らば足れりとすべきか、貴族は喜び金持ちは楽み、而して彼等は傲慢なり、而して彼等は下層人民の如何なる心事を以て、如何なる行為をなして、如何に生活しつゝあるやを知らざるなり。我等は今日の社会に於て考ふべきの多きを有す。

余は高尚なる心事を以て、泣いて其一生の歴史を作りつゝある人の必要を信ず、余は今日我一生の歴史に一の名誉光栄を与へ得ることを自ら祝し、又私かに皇天に向て感謝す。

また翌日の日記には次のように覚悟を記している。

余は猶思ひたり、さきに今日文の経験あらば、尚厚き同情を在監督者に与へ得たらんに、余は時々兎も角も悪事をなせしものなればとの心を起したりき。其為めに冷淡なることありき。今は実に之を悔ゆ。

彼の大なる家、高き塔は何物ぞ、彼処には毎日曜の集会あるべし、彼等は何事を教ふるぞ、世に憐むべきものあるを知るべしや、貧しきものに福音を聴かせつゝあるべしや。

そして「余は残り半生を、全く犯罪者のために与へたし、与ふべし、然り余は死ぬるまで他の事を願はざるべし。日本に帰る時は、出獄者に迎へられずとも、死ぬときは出獄者に泣いて葬りて貰ひたし」と監獄改良事業に懸ける思念を表白している。米国での生活で、とりわけ翌年三月頃迄は留岡とよく逢い、情報を交換しているようだ。

大塚は一八九六（明治二九）年五月の『獄事叢書』に「天下の事||天下の士」という論稿を発表している。⁽²⁰⁾この中で「夫れ囚人の心情は囚人と同じ境遇にあるか若しくはありし者にあらざれば、聡明の君子と雖もナカナカ其深微の処まで洞察すること能はざるなり」と述べ、如何に彼らの心底深く、心宮にまで入っていくことの困難かを指摘し、監獄改良の根底に付き次のように論じる。

嗚呼楊枝を以て重箱の隅をホデル様な監獄改良は余の望む所にあらず、望む所は根本的改良にあり、否改革にあり。誰ぞや、八万囚人の生命を一身に引き受けて種々雑多なる係累紛糾を截断し、断々乎として長期刑を廢し、断々乎として不定刑期を用ひ、囚人に希望を与へ、囚人を自然に復し、囚人のために一道の生路を開通するもの、嗚呼誰ぞや世界の大勢を達観し、我邦の榮譽を尊重し、天道に従ひ人情を顧み監獄改良の一大時期を造りて日本文明史上に百丈の光輝を揚ぐるもの。此の如きは区々たる一身一家の安危に心を奪はれ、眼前の毀管籠辱に醜厭たる俗吏輩の為し得べき所にあらず、天下を以て己れの任となし、中に堂々たる大節大識見を抱き、身を以て其主義に殉する至誠の士、余が所謂天下の士、独り之れを能くすべきのみ。四千万中、豈に此の快男児ならんや、余若くのことき人の斯道の為めに鞭を執らんことを願ふや切なり

『大塚素遺稿』に収載されている在米時代の日誌は九七年六月一七日でもって終わっており、それ以後の生活についての詳細は不明の状況である。この間の彼の状況について、彼の書簡等を通して垣間見ておくことにしよう。

例えば一八九七年九月一二日付けの留岡宛の書簡では伝道につき、富者よりも「貧きものに福音はきかせらるゝ様心身を碎く人こそ、誠に幸なる、世にも必要なる人と存申候。宗教にして可憐の人に人生の何物たるを教へ、人生の

真味の存する所幾分にも知らしめずんば無用の長物と存申候。兄よ雄筆を揮ふて世の伝道者か世の中より見棄てられて居る貧しき者に先づ眼をそゞぎ候様御勧め被下候、「教会を以て世の心の痛める人の病院とせられんことを希ひ申候⁽²¹⁾」と伝道者や教会の有り様を開陳しているのは彼の当時のキリスト教観が知れ得る興味深いものである。

また翌年一〇月六日の書簡では「広津兄及小生等同志社同窓の友たる児玉兄と同行三人にて南遊、先づ費府にて公共的建築の宏大なるを喜び、支那料理を食ひ、日本帝国軍艦笠置を見、又彼の東監獄を訪ふてカシデー典獄と相見致候。……略……ワシントンにては最も遊覧に勉強致し、大なる見物は大概見尽し申候。見たる中に就て尤も意に適ひ喜はしめしものを挙げば、第一はワシントンの記念碑に御座候⁽²²⁾」と友人達との遊学の様子が報じられている。

尾見薫記す「略歴」によれば「君米国に在るの日、偶々米西戦争に遭逢す、機を視るに敏なる君は、米国興廢の機に際し、民心の帰趨を察するは此の秋に在りとなし、自ら志望して水雷艇に座乗し、サンチアゴ攻撃に向ふ、一は米軍に対し、任侠の義に勇むありしによるなるべし、サンチアゴ港口閉塞戦に於ける君は、砲彈雨注の間、自若として殊勲を建つる事少なからず、彼れが蔵する星流旗は当時の惨戦を語る可く、後、米国政府は君に記念章を贈り以てその功を賞せり」（『人道』一八三号）とある。かかる武勇伝を証明する記事は『同志社校友同窓会報』五号の「予て監獄事業研究の爲め渡米し居らるゝ同君には今般米西戦争に米国義勇艦隊に加はり水雷艇に乗り込みキューバ方面に向ひ居らると聞く⁽²³⁾」という消息記事がそれを物語っている。そしてその後大塚は米国より英国、仏国に渡り視察を行ない五年振りに故国の土を踏むことになったのである⁽²⁴⁾。

この米国時代、畏友・山本徳尚に送った詩中に「具閑辛酸氣益豪 憐他肉食太平曹 心懷家国百年計 身役馬牛一日勞 此間消息人知否 笑對寒灯撫宝刀」（『人道』一八三号）というのがあり、苦勞の中に身を沈めていた。彼は極めて国士的であり、上述のようにアメリカの海軍水雷艇に乗り、スペインと闘うという武士的な資質を保持し、多く

の学友と交わり乍ら且つ泰西の学問をも積極的に学んでいたのである。この経験がまた帰国後の社会活動に生かされていくことになると言えよう。

四、帰国—同志社幹事

大塚は一九〇〇（明治三三）年一〇月、イギリス、フランスを視察して約五年ぶりに帰国する。そして翌年一月、監獄改良事業とか社会事業の仕事でなく同志社幹事兼教授に就任する。²⁶これは塘茂太郎の後任として就いたようである。大塚の米國遊学中、同志社でいわゆる「同志社問題」の事件が起こった。彼の國で大塚は中瀬古六郎や山口精一、三宅驥一、牧野虎次らとこの問題に対して談論した記録があり、大塚自身同志社の再興に付き熟考したことと推察される。かかる同志社への危機感が彼の同志社への就職に繋がっているのだろうか。当時同志社は入学者の減少で財政的にも経営の苦難の状況に追い込まれていた。

ここで先ず同志社幹事時代の²⁷大塚につき、二、三の人々から思い出を語らしめることにしよう。日野真澄は「君は同志社の幹事として新島先生以来の所謂精神主義の教育を復興せんが為めに東奔西走せられて苦心一方ではなかつた」と回顧し、また中瀬古六郎は「大塚君は已に広津校長の辞任したる後を引受けて同志社全局の衝に当り、其の周到なる知略と綿密なる事務の才と、粘張強き隱忍心とを發揮して校務を処理し、傍又其春の日よりも暖なる同情と愛憐とを以て生徒を撫育し、教員に対しても能く忍耐と尊敬との念を以て之を遇し居られたれば、全校翕然として君を敬慕せざるもの無きに至つた」（『人道』一八三号）と述懐している。大塚はとりわけ片岡健吉の校長時代力を發揮したようである。同じように同志社の経営に尽瘁している様子を加藤延年は「当時氏は實際に於て同志社の校長なり」

と評し、次のように述べている（『人道』一八三号）。

氏性義侠にして人を見るの明あり。赤心を推して人の腹中に置き、よく之を誘掖す。又人に長たるの量を具へ、人心収攬の道に通じ、幕下の氏を尊敬帰服せしこと驚嘆に値するものありしも、一面には往生之を快しとせざる者亦これなきにしもあらざりき。要するに、氏が同志社に於ける事業は、氏が在米中の同志を拉し来りて、洋行者内閣を組織し、敏腕を揮つて萎靡せる同志社学生を激励鞭撻し、片岡社長を奉じて同志社の天下に号令し、執権専横の譏をも顧みずして或は職員を進退し、或は学制を改革し、同志社制服制度の如き、毎朝の礼拝を随意とせず学生をして学課同様に必ず出席せしむる規則の如き、吾人をして今猶ほ大塚氏執権時代の余沢を被らしむるもの亦少からず。

大塚の同志社での職務は、英語を教える他、一九〇一年に各寮長を統括する初代の総寮長、また『同志社校友会報』の編輯（九号〜一四号）、同志社女学校の幹事（一九〇一年四月〜一九〇二年三月）も兼ね、そして校友会の幹事の任にも就いている。²⁶

大塚は片岡氏の急逝により就任した下村孝太郎社長（一九〇三年一〇月三日就任）の時、辞任する。中瀬古の回顧に依れば、片岡の死後、「群雄割拠の情勢次第に成り、老師デビス先生が日夜の熱禱と血涙とを以て其の間に斡旋せらるゝも、内部の調整益々困難を覚ゆるに至り、この情勢を察知した大塚は「一朝慨然涙を揮つて其の地位を見捨て」たということである。²⁷そして一九〇四（明治三七）年六月、同志社を辞任し、翌年京都市長・内貫甚三郎の令息・清兵衛と共に米國視察の旅につき、そして十一月帰朝する。

ちなみに大塚は一九〇二年春、同志社女学校出身の浜田文子女史と結婚し、翌年四月七日、長女・和子がそしてその翌年長男・宏が生まれ、家庭的に恵まれた生活を送ることになった。

五、キリスト教青年会

一九〇五（明治三八）年四月、キリスト教青年会同盟が満州出征軍人の為めの軍人慰問事業を開始するにあたって、大塚は総主事として選任されることになる。そもそもこのキリスト教青年会同盟とは都市YMCAとして一八八〇年に東京に最初に設立されたものであるが、⁽²⁸⁾一九〇三（明治三六）年七月、日本学生基督教青年会同盟（一九〇一年設立）と日本市基督教青年会同盟（一九〇三年設立）とが合併し成立したものである。そして同盟は一九〇六年二月より機関誌『開拓者』を刊行した。その第一号の巻頭論文、「開拓者」の使命に曰く、「我等の懐ける宗教的信仰と此の信仰に原きて有する現在に對する見解と将来に對する希望は我等自ら樹立して發言権を要求すべき論壇あることを認めしむ。且つ『開拓者』は将来に於て社会の開拓者たるべき青年の団体を代表せる機関なり。将来に於て開拓者たらんためには先づ自己の理想を開拓し天分を充実するの急務なることを識るとともに、四周の境遇に對照し自ら立てる地位を正当に認識することにより初めて鮮明なる自覺に達し得べきを知る」と。

このキリスト教青年会同盟に入るにあたっては江原素六の懇請を受けたものである。時恰も日露戦争中であり、大塚は青年会の慰問事業に関わっていくことになるのである。⁽²⁹⁾『人道』一号には「曩きに同志社幹事たりし同氏〔大塚氏〕は、去る十一日、天幕事業の『リーダー』として、数人を伴ひ、遼陽に向つて出發せり」と報じられている。⁽³⁰⁾そして翌年、青年同盟の幹事に挙げられ、軍隊部鉄道部主任として朝鮮・満州に於ける事業を管掌することになる。この経験が後の「満州」での事業に関わっていく導火線となつていったと解してよからう。「日本基督教青年会同盟第二回総会議事録」⁽³¹⁾によれば、大塚は小松武治、柏井園、岸波常蔵、小林道太郎、フィッシャー、グリーン、ヒッパー

トの各幹事とともに出席している。

『大塚素遺稿』には「挾紘日録³²⁾」と銘打って一九〇五(明治三八)年四月から七月初旬にかけて「満州」への紀行文が収載されている。その出発に当って五月五日の日記には「青年会の軍隊慰勞部の主事集まり、満州より帰りしデフオレスト氏の軍隊慰勞部の視察団を聴き、併せて余が送別のために茶菓を喫して談話を為す。小崎弘道、江原素六、ヘルム・ミラー、丹羽、平沢均治、山本邦之助の諸氏あり。ミラー氏は今日 天皇皇后兩陛下より、青年会の軍隊慰勞部の働きを喜みせられ、金壹万円御下賜の内意ありたれば、明日宮内省に出頭して金円受取り来たらんといふ、ミラー氏江原氏同伴して行くこととなる。是は余には以外の福音也、奨励也、余は単に之を聞く為めに東上せしと見ても満足也。小崎氏余に他人の足を洗へといひ、江原氏己の功を立てんとせず、主の榮を顯はせといひ、平沢氏遼陽は我慰勞部の中心となる地位にあれば、総主事たるの積りにて尽力を望むといひ、余は健康の許す限り尽力せんと答へぬ」とある。以下この日録には慰問部の係として前線での体験が赤裸々に叙述されており、貴重な資料となっている。

『日本Y.M.C.A史』によれば、一九〇四年七月から〇六年三月迄の二〇カ月の期間、大塚は益富政助、高橋貞吉、西尾幸太郎等と共に前線に向いて直接事業に当たたとされているが、この間の費用が六万円に達している。この事業に当たったのは三六名の主事・役員で、主なる事業は朝鮮、「満州」の一一カ所に天幕、慰勞部を設けて兵士に対して種々の慰問、伝道、生活面の便宜を計っていくことにある。かかる事業に対して一九〇六年五月二六日、陸軍大臣・寺内正毅から同盟委員長・本多庸一に感謝状が送られ、そして皇室から一万円が下賜されたのである。³³⁾

一九〇六(明治三九)年四月一五日の『人道』には大塚素の消息として「満州より帰朝後京都基督教青年会館建築事業に執筆せらる」とある。朝鮮のY.M.C.Aの創立に、また同年、大塚は大連Y.M.C.Aの創立に關しても重要な役割を果たしていくことになる。³⁴⁾その後大連キリスト教青年会は一九一一年三月一日、青年会館の開館式を挙行し、大塚

は後述するように満鉄の社員として現地に赴任し、更に関係を持っていくことになる。

一九〇七（明治四〇）年四月、東京にて万国キリスト教青年世界大会が開催された。青年会では前年八月より「基督教青年会万国大会寄付金募集趣意書」を全国に配布していることからこの大会への熱心な取り組みが窺える。また当然その機関誌『開拓者』は開催の前夜、大会の特輯を大々的に組んで³⁵いる。例えば二巻四号（一九〇七年四月）には巻頭論文として「万国学生基督教青年会同盟大会」と題して、そして「東洋的意識に存する崇高の要素」（チャールス・ホール）、「我が宗教界に於ける青年の地位」（海老名弾正）等が掲載されている。同時にこの時、救世軍のブース大將が初めて日本を訪れたことも重なり、キリスト教界は絶好の宣伝の機会に面した。

一方、三月刊行の『人道』も「青年会号」と銘打って世界大会を喚起する特輯を組んだ。³⁶そこには「青年会の社会的使命」（留岡幸助）、「健全なる社会と青年会の発達」（新渡戸稲造）、「我が万国学生基督教青年会」（本多庸一）、「万国学生基督教青年会同盟大会の意味」（元田作之進）、「万国基督教学生同盟大会及び伝道」（丹羽清次郎）、「青年会と軍隊」（大塚素）、「万国基督教青年大会に就て」（井深梶之助）、「青年の訓育と其団体」（井上友一）、「日本青年の注意すべき二箇条」（海老名弾正）、「門外漢より観たる青年会」（安部磯雄）、「農村の青年会」（山崎延吉）等が掲載されている。ここにはキリスト教青年会の宣伝、紹介のみならず、日露戦後の青年会の組織化を意図した時代的要求が存していたといつてよい。大塚はこの号の「青年会と軍隊」の中で、わが国の青年会が欧米の青年会に倣い、日露戦争時、出征軍慰労天幕部を設置し国家の非常時に貢献できたことを重要な事業として捉えている。具体的には各天幕部には応接所、書信室、新聞雑誌縦覧室、遊戯室、理髪室、喫茶室、洗濯場、入浴室、運動場及び講話室等を設置し、「征旅の憂苦の慰め、戦士の意気を励まし、病院を見舞ひ、僻地の守備隊を訪ひ、還返の負傷兵を労はり、凱旋の勇者を犒ら」うことを目的としていた。そして「青年会の天幕部は直ちに最前線に進み、其主管は

天来の靈に浴して死生の境に出入する戦士と交わり、有形無形の慰藉と奨励に兼ねて其生命を与ふるべきことを忘る可からざるなり」と論じ、彼ら青年の使命の一つを「国運の伸張」と把握している。キリスト教青年会に属してから、大塚は青年会主事として何回も朝鮮や満州方面を調査或は視察旅行をしている。

例えば、一九〇六（明治三九）年、大塚はキリスト教青年会の機関誌『開拓者』（一一一〇）に「滿韓通信」を、そして次号に「滿州より長江」と題した紀行文を投稿している。³⁷これは一〇月三日の第一信（釜山へ向かう琴平丸より）から朝鮮、中国（滿州）からの八回に亘る通信である。最終通信は十一月一〇日になっており、この時期、約一カ月間、朝鮮、「滿州」を旅したことになる。そして翌年の『開拓者』にも「最近の滿州」³⁸と題して、同様に滿州地方の調査報告論文が寄せられている。

さて一九〇七年一二月の『開拓者』には「国旗の弁」という論文が掲載されている。³⁹ここには彼の当時の彼の「滿州」への思念が如何にあつたかの一端が窺い知ることができる。だが大塚には日本の大陸侵略への痛みは窺えない。

今や我が帝国の勢力は韓半島より南滿州に及べり。而して清韓の民を啓發誘導し、其文明を開発するは、東洋の先覚者を以て自任する吾人か正に勉む可きの責めなり。是れ議論にあらず事実なり。されば有為の氣象に富める吾人青年は、自ら進て之に当る可きは無論の事にして、余は屢滿韓の間を往返して此感殊に深きものなり。願くは吾人をして其身の在る所に旭日の国旗を表はれたる総ての徳義を最も明に、鮮に、十分に發揮せしめよ、而して清韓の民をして望んで以て帰向する所を知らしめよ。之れを是れ能くする能はずんば、帝国今日の勢力は一時の幻と消へ、鷄林秋寒くして、滿州の野空しく同胞の鬼哭夜陰に啾々たるを聞かん。

また一九〇八（明治四一）年四月五日の『人道』には「滿韓に於ける同会の事業觀察の爲め去る二十二日出発せられたり」という大塚の消息記事がある。ちなみにこの記事での彼の肩書きは「基督教青年会軍隊部幹事」となっている。この滿韓旅行の出立の途三月二五日、本間俊平に次のような書簡を認めている。⁴⁰

小生今韓国に赴く途中に候少くとも三千金を満韓に得る能はずば、満韓の事業は維持すること能はず。これ文を得ずば東京に帰らぬつもり、而して成竹の胸中に在るにあらず、唯我々の事業、神と人との為めなり。吾が至誠他を動かすものあらば、目的は達せらるゝ事を信じて罷越す儀に候御記憶のせつ惜みなく与へ給ふ天父に、僕の為め御同情の御祈願願上候東京にて疲勞を感ぜし小生は、沿道の春風に蘇生せし感を覚え候軍中ラスキンの伝を繼ぐ。彼は彼が天授の美術眼を以て社会改良に到達せし消息は興味深きものに候貴兄は社会改良の有望を以て一つの工業に従事せらる、一進して美術の域に入らるゝも亦知るべからず、ラスキン曰く『高貴にして多くの理想を有する絵画は筆致拙しと雖も、高貴理想の点に於て低き巧妙なるものに勝る』と。而して十九世紀の英国絵画界を痛罵して、今日要する所は「神と其造りしもの」とに對する愛なり人道なり慈悲なり己れを棄る事也」断食也、性格の一変也と、是豈大なる説教にあらずや、吾人の生涯をして一つの美術品たらしめよ

この事業を大塚は「神と人との為めなり」と断じているように、彼の内には政治的意図とは無縁な「人道的な情熱」に突き動かされた何かがあったのだらう。そしてラスキンの生涯に肖つての「吾人の生涯をして一つの美術品たらしめよ」という祈りこそ、彼の社会事業に懸ける人生の決断であつたらうか。

最後に一九〇九年二月の大塚の「青年と国運」という論文を通して当時の大塚の思想が奈辺にあつたかをおこ^④う。その論文の中で「吾人日本の青年は甚だアンビシヤスなり、即ち其の心底に誰れも我が帝国をして世界の第一等国たらしめずんば已まずとのアンビシヨンは、我が帝国の未来に對して抱持する驚き信念より流れ来るが如し」と論じ、「国力の充実」の為め如何にして青年の愛国心、奮起を喚起していくかを縷々述べている。

アンビシヤスなる吾人日本の青年が、其の心底に潜める先天的アンビシヨンを満足し、我が邦家に貢獻せん為め、其の全幅の誠心を披瀝して今日努力す可きは何事なる可き。吾人は国力の充実成就せば之れにて直ちに我帝国が世界の第一等国になり得べしと信ずるものにあらず、国力の充実は我社会各方面の発達上目下急務の一なりと論ずるものなり……略……天下の識者経世家か、倫理、教育問題に就て議論するは、畢竟我が国民の道德を一層高からしめんと欲するに外ならず。是の時に方り、吾人基督を信して新たなる人となり、蔽かなる良心の声を畏みて虚言の悪習を擲脱するの実験を有し純正実直、自ら信じて他を信せんと欲する誠意を懐く青年は憚らず其の実験其の誠意を有の儘に告発し、先ず其の朋友の間に一道の清新なる氣風を振作し以て国運

の伸長に寄与する所あるを要す。将来の國運の泰否は今日の青年の責任なり。殊に基督の教へを受けて社会に對する新見解を領し、社会の爲めに新養素となりし自覚ある青年は二重の責任を感じて起たざる可らず。アモス、ホビヤ、イザヤの徒が燃ゆるが如き愛國の熱情に駆られて獅子吼をなせし流風余韻を搦むものは誰ぞ

この論文が発表されたのと時を同じくして京城に統監府が設置され伊藤博文が初代監長に就任した。そして翌年八月日本は日韓併合を断行し、大陸侵略への更なる展開を遂げていたのである。大塚のこの慰問という純粹な主觀的動機に拘らず、そしてキリスト教青年同盟の軍隊慰問事業は、時のキリスト教界の中で国家への自己の存在証明という結果と裏腹に侵略政策という国家の方針にうまく利用されていった。この天幕事業は性格として社会事業的なものであったが、結果として協力していくことになったと言わざるを得ないだろう。その意味で大塚のこの事業への関わりは次の満鉄事業と共に今後の大きな課題として残されている。

六、「満州」の地で―満鉄事業

一九〇九（明治四二）年一月、大塚は南滿州鐵道會社に入社することになる。その總裁である中村是公の許で、慰藉係主任の職務に就く。⁽⁴²⁾『同志社時報』六二号には大塚の次のような書簡が紹介されている。「今般南滿州鐵道會社にて某社員及び家族の慰安向上を図り新たに経営致候諸施設の世話致す為め小生會社の聘に應じ去る十一月二十六日着連仕候住宅は未定に候間御通信は暫らく大連鐵道會社宛に相願度候家族は今猶東京市外の代々木に罷在候春暖の節にもなれば当地（大連）に引き纏め候積に候」⁽⁴³⁾と。

そもそもこの満鉄（南滿州鐵道會社）⁽⁴⁴⁾は、日露戦争後、ポースマス条約により後藤總裁の下、南滿州鐵道株式會社を

設立し経営をしてきたものであり、日本の大陸侵略の交通機関の最たるものであった。加えて輸送関係だけでなく炭坑、港湾の経営そして鉄道施設地の行政や衛生、教育、社会事業をも管轄したのである。大塚はこの満鉄での「慰藉事業」を正に彼の畢生の事業として、五二歳の生涯を閉じるまで積極的に参画していくことになるのである。

ところで大塚の就いた満鉄の慰藉係とは一体如何なる役目をするのであろうか。この件に關し、『南滿州鉄道株式会社十年史』では次のように叙述されている。その発端は一九〇七年の万国キリスト教青年大会である。後藤新平はその時各国の有力者を小石川後楽園に招き、満鉄事業の世界文明に対する日本の使命につき論じた。

當時列席セル米國鉄道青年會創立者ノ一人ナルアール・シー・モールス氏ハ大塚素氏、シー・ヴィ・ヒバード氏ト共ニ滿州ニ來リ總裁ヲ訪問シ米國ニ於ケル鉄道基督教青年會創立當時ノ情態ヨリ同會カ鉄道従業員ノ品性ヲ高潔ニシテ其能率ヲ増加スルニ尽力スル実状ヲ語り且上下ノ意思疎通ノ一助トシテ滿鉄従業員ニ精神的慰安ヲ与ヘ生活ノ向上改善ヲ計ル為メ青年會事業ヲ施設セシムコトヲ懇願セリ会社ハ草創際直ニ之ヲ採用スル能ハサリシカ、明治四十一年七月總裁ハ江原素六、井深梶之助、フィシヤ、大塚素四氏ト會見該事業開始ノ機到レリトシ即沿線各地殊ニ荒涼タル中間駅等ニ在勤スル者及其家族ヲ慰藉シ兼テ上意下達下情上通ノ機關タラシムルカ為メ明治四十二年十一月慰藉係ナルモノヲ設ケ大塚素ヲ主任トシ本部ヲ本社ニ置キ、全線ヲ四区ニ分チ瓦房店、遼陽、公主嶺及安東ニ駐在員ヲ置キ斯業ニ經驗アル者ヲシテ之ニ任ス⁽⁴⁵⁾

既述したように大塚は米國遊学中より、米西戦争にも参加し、米國の青年會事業、鉄道青年會には多くの関心を持つていたようだし、日本にもかかる會の発足を切望していたようである。そしてそれを満鉄をとおしてやうていく構想を持ったものと考えられる。そこで働く人々への伝道と社会事業を推進していく意図があつたのだろう。こうして大塚は故國日本を離れ、家族と共に「滿州」の地で働くことになる。

大塚は滿州に渡つてからも家庭学校の機関誌『人道』に「閑窓靜話」と題して七三号（一九一一年五月）から一一〇号（一九一四年五月）まで、一〇回余小論を寄せている。これは滿州での事業の報告ではなく、いわば人生論的なエッセ

セイである。例えば七五号掲載の「確信ある青年」⁽⁴⁶⁾という短文では次のように論じている。

黒頭紅顔の青年に寄語す、爾若し心頭些子児の懊惱不安を感せば、振氣一番爾の能力体力に向て、思ひ切た重量を加へよ、具體的にいへば、理科、数学、地質、天文、文典論理何れにても其好む所の書物一冊を取て専念に精読するか、或はジリ／＼と汗の流るゝまで駆け足するか体操するか柔道剣道をなせよ、かくすれば妄想空想は全然消え失せて青年らしき元氣自ら充実し来るを実験せん。

或は「進で小慈悲を行ふべし」⁽⁴⁷⁾という文の中では、

我等貧乏人は大慈悲を行ふ資力はないが、小慈悲を實行する機会は毎日ある。疲れたるを憐ひ、悲めるを慰め、涙を以て憂ふる者と共に泣き、笑顔を以て恐れる者の怒りを聞き、善を為す人を敬ひ、邪に傾く人を正し、敢て賢哲を以て自ら処すれども、一片の真情人の益を図て已まざること毎日出来る。而して是れ亦た愉快なる人生である。

大塚の各文章には古今東西の偉人名が沢山出てくる。彼が如何に広い教養の持ち主であつたかも証されるものである。また『大塚素遺稿』には「一日一想」という短文が収載されているが、これは一九一一年中『満州日々新聞』に連載した二百数十の中より抜粋したものと、と解説が付されており、当地の新聞にも多数文章を書いているようである。この点に関しては後日の課題としておきたい。

更に『大塚素遺稿』には「満州に住みて」という雑文や一九一四（大正三）年七月一七日から八月一〇日にかけて「極東露領横断記」という旅日記も収録されている。その最後の日誌（八月一〇日）には「午後五時発車、夕日落ちて西天一面黄色に彩られ、明星一ツ煌々として壮大なる観あり」と記し、次のような詩を書いている。⁽⁴⁸⁾

チカチカと刺す八月の真昼の日／並び立つトーポリの白き葉裏を照り返し／道行く人の目をぞ射る。／垣を繞る潤葉の樹、ゆたかなる影を投げて、／草深き広き庭、薫る風の中を／すはだしの稚児遊ぶ。／人の造りし二〇世紀の都は、住むにあしからねど／万年の昔我が祖先が、受けし自然の楽みは、／人のとはにあこがるゝところ。／疎なるアシーナの林は、日脚斜にすべる時、／牛は木陰を人はオフイスを出て、／新しき気分夕餉つくる家妻の胸にみつ。／華やかなる黄色、地平線を一抹し、／遠山は紫

深く、近山は濃く、／野煙たな引き、人も里も静けき時、／キラキラと夕の星一ツ

そして「月下還哈爾宝」と題して「出山来又入平原 一味晚涼滿晚村 慣眼風光還可喜 塞雲隴樹月黄昏」という漢詩を残している。

さて一九一七（大正六）年七月、第一次世界大戦中、大塚は翌年一月迄、満鉄より米国出張を命じられる。三度目の洋行である。この時は米国各地で主に社会事業の視察を行なった。この視察を終え、帰朝し東京の井上友一(49)の勧めにより講演したのが「労働大学としての自動車会社」というもので、この講演記録は雑誌『斯民』に掲載されている。近代的な設備、厚生施設や経営システムを導入し生産を上げているフォード社につき、詳細に報じたものである。大塚の文章にはしばしばこのフォード社のことが取り上げられている。

例えば『遺稿』に収載されている「思ふがまゝ」という文章は一八年五月六日から七月一日にかけて鉄道院嘱託として視察旅行し、鉄道院総裁官邸に於て述べたものに加筆されたものである。鉄道院の「給与と人物」を論じた箇所では「ドーカ鉄道院がフォードの様に、雇傭人に對し、多く与へることを以て院の誇りとする様な方針を取り、此十万の現業員と其家族とを安心し、満足し、感謝して専念一意、後顧の憂なく氣持よく、働き得る様に仕向けて頂きたい。而して一般の実業界に使用人待偶上の好模範を垂れて頂きたいと思ふ」と従業員の環境改善等に付き、種々提言をしている。彼の事業には米国の鉄道青年会の構想が多分にあったから、とりわけ日本の鉄道で働く人々への関心は強かったと思われる。

最後に大塚の作と思われる「満鉄見習寄宿舎」の各室に掛けられていた「壁書十則」をみて、彼の人生訓、処生訓を窺っておこう。

立志 自家の手腕を以て自家の運命を開拓し、以て国家有用の人物と為る志を立つべし。

忠誠 己に社会に衣食し又日々実務を訓練せらる、宜しく専念社会に奉仕するの覚悟あるべし。

公私 社会の事は公なり身家の事は私なり。私事を後にして公事を先にするは、義理に明かなる士人の道なり。

廉直 微物と雖も己れの所有に属せざる物品を私費乱用すること勿れ、是れ忠誠の心術を害すればなり。

自制 自制が足らずして未だ立身せしものあるを聞かず、衣服器用之美を求めず酒煙を退け断じて借を金なきざるべし。

礼讓 長者に対しては言貌共に恭敬なるべし、同輩の交際は真率なるべし、阿諛と野卑とは男子の恥なり。

友誼 心事公明正大にして而して後互いに相信頼することを得、深く思を此に致し終生渝らざる友誼を結ぶべし。

切磋 人誰れか過なからん又誰れか短所なからん、同輩中若し過あらば之を規し、短所あらば之を補ふべし。冷々看過して矯正の意なきと、他の忠言を拒んで反省の心なきとは切磋の道に非ず。

勉学 智を磨き才を練らずんば、以て天与の能力を伸ぶるに由なし、寸陰を惜しみて学問を勤め、悔を後日に貽すこと勿れ。

養気 気魄旺盛ならざれば志業成り難し、気魄の宿る所身体に在り、武道運動を励み寢食を節し健康を保つべし。

大塚のかかる教育は社員のみならず、自己への日々の問いかけであつたらう。亡くなる二カ月前病気で倒れ四〇度の熱の中、大塚は満鉄会社の将来に対して次のように語っている。「余は我会社五万の人々に対し、特に所属長諸君に望む。力めて華麗の生活を斥け、中元歳暮の贈答を量質共に控へ、慶弔の如き其範圍を軽減し、各人をして予算的生活を励行せしめ、融通金の意味にあらざる据置貯蓄会を創設し、余裕を挙げて之を会社に蓄積し、労使協調の実を挙げ後顧の憂なく、進んで社会進展の爲め充分なる能率を揮擢せられんことを至嘱す」と。大塚は最後まで会社に奉仕を果たそうとしているようにも思える。そして大塚の遙か遠方に見ているものはあくまで日本人民の幸福であり、国家の発展であり国家への忠誠であつた。このことは国士としての大塚の人生の術でもあつたのだが、そこには総じてアジアへの視点が落ちていると言わざるを得ない。

七、その落日

『大塚素遺稿』に収載されている大塚の最後の日誌は一九二〇（大正九）年一月から五月二十八日にかけてである。⁵³ それには次女・多賀子の病氣と看病そして死去（五月八日）について多くが認められている。五月一〇日の段には「十時前磯村牧師により簡單なる祈禱会をなし、教会に赴く。十時葬儀、敷島町会堂に二百六七十名にて入り切れず。市内の重なる人々の貴重の時を、多賀子の為めに費やし下さることを思ひ、恐懼且つ落涙せんとす」とあり、また一三日には「荆妻一夜白髮生。非常に疲れを感じず」、そして一八日には「多賀子小追悼会を八時より宅にて開く。心身弾力を失ひたることを自覚す」とある。このように大塚夫妻にとって次女の昇天はかなり精神的苦痛であった。そして日ならずして心労も重なって今度は大塚自身が病に倒れることになる。

『遺稿』によれば大塚は一九二〇（大正九）年六月二日、病を得て、大連の病院に入る。そして八月四日、昇天する。死去まじかの状況は弟・小一郎の記した「悲しき旅日記のぬき書」⁵⁴に依拠してみてもおこよう。小一郎が兄の病「脳膜炎」となり大連の病院から電報を受け取り秋田を経ったのは七月二十七日のことである。三十一日に上陸し直ちに病院に見舞っている。「病室に入るや嘗て見し事もなき喜びの表情をなし、握手して互に暫し言葉もなく涙にくれたり。暫くにして平生と少しも異ならざる元氣にて、（一）、氷柱、盆栽、特に設けられたる受付等凡て友人愛情の凝固である。（二）、最後の十年働きたる関東州に残骸を埋むるは本望である。（三）、特に世話になりたる人々を招待して貰ひたい事など」を語ったということである。一時は持ちなおしたように思われたが四日息を引き取った。そして七日葬儀が営まれた。「満州各地は勿論京城などよりも夫々代表者来会せられ故人の氣風に叶ひたる質実にして精神の籠れ

る葬儀執行せられたり。花鳥は絶対に御断りして目に美々しき色なきも親友がしんみりと読まるゝ履歴真情籠れる弔辞後藤新平、中村雉次郎、中村是公等の諸氏より送られたる鄭重なる弔電百五十余通の中より留岡兄の一通朗読せられ満鉄総裁は弔辞を読みて遂に鼻を噉らされたるなど真に心々したる儀式にて涙の中にも慰めを得たるを覚えたり」と。大塚の骨は彼の遺志どおり「満州」の地に埋められた。「早してアカシヤの花雪とふる いつ雨ふるか冷し朝風」、これは大塚の最後の日記に認められた歌である。

母校の『同志社時報』⁽⁵⁶⁾では彼の昇天については「八月四日逝去せらる茲に謹んで弔意を表す」と一行報道されたにすぎないが、同年九月一五日の『人道』一八三号は「大塚素追悼号」となっている。同号には留岡、牧野、後藤新平、中村是公、国沢新兵衛、海老名弾正、井深梶之助、山室軍平ら多くの思い出や追悼文、彼の遺稿等が、そして妻・文子の「我も亦君の御あとをしたはまし袂にすがる子らのなければ」という歌も掲載されている。

また一九二三（大正一二）年一月には、有馬四郎助、牧野虎次、留岡幸助、小川実也らが編輯に当って、八三四頁からなる大著『大塚素遺稿』が上梓され、故人の遺志、業績が江湖に披露されることになったのである。⁽⁵⁶⁾その「序」に言う、「故大塚素君は志が高遠で実行は卑近より始めた人でした。ですから久しき渡りますれば必ず其志を遂げる人でした。其一例として故人が満州で経営した仕事を挙げませう。故人の志は社会を改良するにありました。故に其の理想を南満州鉄道会社に於て行はうとしました。今日同会社の社会課の存立は故人が据えた土台の上に出来たものと思ひます」と。五〇歳余の生涯は異境の地であっけなく訪れ、志半ばにしての昇天であったかもしれないが、彼の懸命に生きた軌は事業や著書をとおして後世の人々に残されていくことになった。

この小論を擲筆するにあたって、戦後の日本の歩みと関連させて改めて問う時、この小論では十分に究明できなかったが、大塚の畢生の事業、即ち「満州」での事業とは一体何であったのかという疑問に到達せざるを得ないのである。それは日本にとって「満州」とは一体何であったかという問いとも共通性を保持しているとも言つてよからう。

後年の「王道楽土」としての「幻想の国家」の喪失を想う時、大塚の仕事とは、幻影のなかの蜃気楼に過ぎなかったのだろうか。異郷での生活者としての営為は国家の政治の中で否定されざるを得ないものだろうか。そして個人の誠意に関わらず社会事業とは政治の延長上の業としてしか位置しなかったのだろうか、と素朴な疑問を払拭せざるを得ないのである。だが一方でそこに確かに居た日本人、異郷の中で日々の営みに精を出し、働いていた民衆の生活の向上を念じ暮らしていた人々を憶う時、彼の営為は決して否定出来がたいものでもある。愛国者、国士的風貌を漂わせた大塚の社会事業家、キリスト者としての営為は過小評価すべきではない。植民地での社会事業との関連で今後再考を要する人物、課題であると考ええる。そして大塚の足跡と共に彼の思想を考えてみる時、彼の情熱と裏腹に社会問題への認識やアジアへの視点の欠落を思わざるを得なかった。これも今後残された課題であろう。

この小論で少しは明らかにしたように彼の社会事業家としての評価は決して小なるものではないのである。この大塚の業績と関連し、満鉄には社会課が設置せられ、そして彼の畢生の志を継ぐために同志社で同期であった牧野虎次がそこに就職し、その事業を発展させていくことになる。大塚が初期に抱懐した監獄改良の事業は帰国後は全くといっていい程、具体的には展開されなかったが、その思念はキリスト教青年会の或は満鉄での事業として形を変え表わ

されたと解せられる。大塚の生涯を一先ず追ってみるといふ所期の目的を一応果たし終えたいま、残された課題を視野に入れ、今後更に大塚について論じていく必要があると思われる。

注

- (1) この尾見薫の記した「略歴」は『人道』一八三号（一九二〇年九月一日）に掲載されたものである。大塚の履歴は『大塚素遺稿』にも掲載されている。また筆者は『キリスト教歴史大辞典』（一九八九、教文館）に略歴を記している。ちなみに『同志社文学』では大塚右金次として消息が報じられている。
- (2) 『人道』一八三号（一九二〇年九月一日）。
- (3) 牧野虎次『針の穴から』（一九五八、牧野虎次先生米寿記念会）三七〜三八頁。
- (4) 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』第一巻（一九八三、同朋舎）一四〇頁。大塚は新島に関してよく文章の端々でふれているが、例えば『開拓者』七・四・五には「福沢先生と新島先生」という論文があり、両者を比較対照し思い出を込め論じている。
- (5) ちなみに、一八九二（明治二五）年普通科卒業の同期は、牧野、山本の外、伊庭菊次郎、松田宇三郎、児玉亮太郎が、別科神学には高橋鷹蔵、野口末彦らがいる。また恩師デビスに対しては『同志社時報』七二号（一九一〇年二月二五日）のデビスの追悼号の中で「故博士の崇高忠格の品性は永く我等の衷に活くべし善を見て悦び呉るゝ人一人此世より滅りて冬枯れの空殊に淋し」と偲んでいる。
- (6) 当時、岡山にいた安部磯雄初め、新島、ラーネッドや柏木義円、そして山室軍平ら同志社の学生が石井の岡山孤児院に対して物資両面から協力していたことは、同志社の当時の雰囲気を知るうえで重要なことである。
- (7) 牧野虎次『針の穴から』（一九五八、牧野虎次先生米寿記念会）三七頁。
- (8) この「日誌（京都より北海道まで）」は『大塚素遺稿』（一九二三）に掲載されている。時期は一八九二年七月中旬から同年一〇月二五日迄である。
- (9) 北海道集治監教諭師時代の原、留岡等については、三吉明「北海道における原胤昭」（『北星論集』八号）や小池義孝『鎖塚』（一九七三、現代史資料センター出版会）、拙稿「空知集治監時代の留岡幸助」（『キリスト教社会問題研究』二八号）等

を参看されたい。また大井上輝前の略歴については拙稿「大井上輝前」『キリスト教歴史大事典』（一九八九、教文館）所収を参照されたい。

(10) 銚路集治監については、重松一義『北海道行刑史』（一九七〇、図譜出版）や財団法人刑務協会編『日本近世行刑史稿』下巻（一九四三、矯正協会）を主に参照した。

(11) 同志社大学人文科学研究所編『留岡幸助著作集』第一巻（一九七八、同朋舎）三三頁。この会議については『監獄雑誌』五巻一・二号に詳しく報道されている（『留岡幸助著作集』第一巻、二六―三八頁所収）。

(12) 『基督教新聞』五四一号（一九九三年一月八日発行）。

(13) 最初この和綴の本は一九〇一年に発刊されたものであるが、後に大塚素の実弟・大塚小一郎により一九三四年六月その複製が刊行されている。そしてその末尾には「この二人の神の子の生涯は誠に神の栄を現はしたものであつた、その神の栄の現はれ的一端である此の書物はまた二人を記念することなき榮である」と小一郎の言が述べられている。

(14) 例えば第五章の末尾は二月二七日付けで「今朝筆を執りて復た之を描くに忍びず、時計と競争して記し了りぬ、正に是十時、平生の出動時に後れしといへとも差当りたる用あるにあらざれハ事ニ害なし、幸に此記したる数番兄の一顧を得は或ハ其家國に於て殊に我党の監獄事業に於て益する所なきにあらざる可し、今年ハ之を以て最終とす、兄が心靈肉体共に健かならんことを切に希ふ」とあり、第六章の文頭は「新年ニ入りテヨリ三日、未タ一封ノ年賀状モ他ニ向テ発セス、全ク監房ニ在テ時ヲ費ヤセリ、今四日下午、始メテ小閑ヲ得タリ、親朋故旧ニ向テ慰懃之情ヲ通セントス、而シテ先ツ聖書ヲ繕テ兄ト共ニ基督ノ書ヲ考究セント欲スルノ情ヲ禁スル能ハス」と認められている。

(15) 有馬の生涯については三吉明『有馬四郎助』（一九六七、吉川弘文館）や『有馬典獄遺稿集』（一九三七、同上刊行会）参照。有馬は一九八八（明治三二）年五月一日、彼の自筆『要録』に「雲南坂教会ニ於テ留岡牧師ニ依リテ洗礼ヲ受ケ入会ス」と認めている。また有馬は『人道』一八三号で「我が師友としての大塚素君」という追悼文を書き、『友愛』の件にもふれている。

(16) この漢詩は復刊『人道』一二号（一九三四年五月一日）収載の牧野虎次「友愛の至情」の論文中や『大塚素遺稿』にも収載されている。

(17) 留岡の渡米経緯、在米生活については、拙稿「米國遊學時代の留岡幸助」（『高野山大学論叢』一六号）を参看されたい。

(18) 『大塚素遺稿』五九九―六〇〇頁。

- (19) 大塚の米國遊學時代に相當する日誌「渡米日誌」、「在米勞働日誌」、「波上の生活」は『大塚素遺稿』（七一五～八一九頁）に収載されている。
- (20) 『獄事叢書』二四号（一八九六年五月一九日）。
- (21) 同志社大学人文科学研究所編『留岡幸助著作集』第五卷（一九八一、同朋舎）二一四～二一五頁。
- (22) 同右、二二一～二二三頁。
- (23) 『同志社校友同窓会報』五号（一八九八年九月二二日）。また『同志社校友同窓会報』二号（一八九七年六月二〇日）によれば當時の大塚の住所は「米國ブルックリン」となっている。
- (24) 『大塚素遺稿』に収載されている「滯英の追憶とジョン・ハワード」という論文の卷頭には「明治三十三年の春夏の候、余倫敦に客たりし時、ジョン・ハワードに縁故深きカーヂントンと、『天路歷程』の著者が生地エルストが、何れも市を北に距る僅かに六十哩ばかりなるを以て、其処に一日の清遊を試みたりき」（六一頁）と述べ、イギリス滯在時代の諸事について回顧している。
- (25) 當時の大塚の消息として『同志社校友会会報』七号（一九〇一年二月一日）に「米國に在りて監獄事業の視察を為し居られしが、去年の秋帰朝されたり」とあり、また『同志社校友会会報』八号（一九〇一年八月七日）には「教職員の変動」として「本年新に聘せられたる人々の中には大塚、広川氏等あり四月には永く會計並に幹事として本校の爲めに尽されたる塘茂太郎氏及び数学教師として教鞭を取られたる中村久熟氏は我校を辭して東上せられたり大塚氏は現在幹事の職を取られ総塾長として又傍ら英語を教授せらる」と報じられている。
- (26) 『同志社百年史』通史編一（一九七九、同志社）参照。ちなみに同志社時代一九〇三（明治三六）年一月、大塚は次のような書簡を柏木義圓に送っているが、この頃より青年会事業との関わりが窺える。「謹啓次回万国青年会大会へ来る三七年我日本ニ於て開く事ニ略相決し候趣ニ就てハ在京なる同志社理事一同ハ高野氏より該大会之準備ニ必要なる費用ハ資産之運用より生ずる利益を以て引き受く可しとの事を聞き此好機を逸せず我同志社を其会場として万国の青年と氣脈を通ずる端を開かんことを切望し他の理事諸君に於て御不同意も無之候ハ、片岡社長より本日廿日東京にて開かる可き諸学校青年会評議員会ニ其旨申込度との事ニ候間乍御手教御賛否之処電報にて小生迄御願申上候也早々教具」（同志社大学人文科学研究所所蔵）。
- (27) 『人道』一八三号（一九二〇年九月一五日）。

(28) キリスト教青年会同盟については、主に奈良常五郎『日本YMCA史』(一九五九、日本YMCA同盟)を参照した。

(29) この時期のキリスト教青年会の慰問事業についてこの事業を批判的に論じたものに山口光朝『近代日本キリスト教の光と影』(一九八八、教文館)や倉橋正直『日露戦争中のYMCAの軍隊慰問事業』『榎博士頌寿記念東洋史論叢』(一九八八、汲古書院)等がある。

(30) 『人道』一号(一九〇五年六月一日)。この時期、大塚は『開拓者』のほか『基督教世界』や『福音新報』にも『満州』での報告を寄せている。

(31) 『開拓者』一一八(一九〇六年九月一日)。

(32) 『大塚素遺稿』三三三〜四一四頁。この『日録』は「将赴満州慰撫我將卒有作」という題で「百戦沙場塵未収 我兵十万擁戈矛 薰風四月鳴鵑節 欲慰三軍入満州」という漢詩で書き始められている。以下青年会主事の仕事以外では興味ある記録が窺えるが、例えば監獄につき、「満州の監獄はハウアード以前の情態也、重罪監は普請中にて囚人を見ず、通常の監に入りしに同じ棟の中苦力の住むあり、夫婦ものも住むあり、而して其傍らには露探として捕へられしもの、窃盜せしもの、雑然として群居して博奕を為す」(四〇一頁)と記されているが、以前監獄改良事業に覚悟した大塚の心境は複雑であったと推測される。一方、この『日録』は満州でのキリスト教史からも貴重な資料である。この件に関しては岡田藤太郎編著『遼陽基督教會史』(一九九一、遼陽教會ゆかりの会)参照。

(33) 一九〇八年五月二六日、陸軍大臣・寺内正毅から同盟委員長・本多庸一へ送られたこの感謝状の文面は以下のとおりである。「出征将卒ノ労苦ヲ慰藉スルノ主旨ヲ以テ慈善ノ事業ヲ創始シタル基督教青年会ハ明治三十七八年日露戦役ニ際シ我軍隊ノ為メニ尽ス所アラントシ明治三十七年九月上旬韓国鎮南浦ニ慰問部開設以來明治三十九年三月ニ至ル約二十ヶ月ノ長キニ亘リ野戦軍ノ北進ニ伴フ戦域ト共ニ該慰問部ハ韓国及満州各地ニ設置スルニ至リ其数十有巷ヶ所ニ及ヒ此間多大ノ経費ト勞力ヲ費シ各種ノ方法ヲ以テ遠征将卒ノ無聊ヲ慰藉シ其事業ノ有益ニシテ而モ且ツ実施ノ完全ナリシハ出征日本軍部ノ等シク現認スル所ニシテ其慈悲ニ浴シタル将卒ハ深く感銘感謝シタルハ本官ノ夙ニ信スル処ナリ今ヤ出征軍ノ凱旋ト共ニ本會事業ノ終了ヲ聞キ其貢獻ラレタル赤誠ニ対シ満腔ノ謝意ヲ表シ併テ該事業ニ従事セラレタル慈善家諸君ノ好意ニ向テハ深厚ノ敬ヲ表ス」(『開拓者』一一五)。

(34) 大連キリスト教青年会については中川竹太郎『恩寵廿年』(一九三〇、大連基督教青年会)を主に参照した。また大塚は開館当時、青年会の理事に就いており当初より、その中心人物であったことが窺える(同書八八頁)。

- (35) 『開拓者』二一三(一九〇七年三月一日)と同誌二一四(一九〇七年四月一日)、そして同誌二一五(一九〇七年五月一日)には大会の記録が収録されている。
- (36) 『人道』二三号(一九〇七年三月一日)。
- (37) 例えば『開拓者』一一一(一九〇六年十一月一日)の「第六信」は旅行の最北端なる「公主嶺」からの通信である。「…略…今朝当地に参りたる重なる目的を達し候間快然遼陽に向ふて南下致す積に候。当地には二千三百の同朋有之、露國置土産の煉瓦造りの家屋百八十許有之候、四顧茫漠山影を見ず、昨今勁風平蕪を吹き颯々の声凄まじく候、蓬の一種一かゝへもあるもの風にふき払はれ原野の上を転々し行くを見、始めて『君是飛花我断蓬』の断蓬を知り申候、昨日は我々人為的に此断蓬をなして打ち興じ候、富士の山にて石をころがし候よりも面白く候」と便りを寄せている。
- (38) 『開拓者』二一七(一九〇七年七月一日)。
- (39) 『開拓者』二一一(一九〇七年二月一日)。
- (40) 『大塚素遺稿』六一六～六一七頁。
- (41) 『開拓者』四一二(一九〇九年二月一日)。
- (42) 中村是公は後日「抑も私と君とが相識る如うになつたのは、曩に満鉄に於て福祉事業を開始せんとするや、江原素六氏と外二三の名士の推薦に依つて君を得た時に始まつている。…略…気品も高く学殖も却々豊かであつて、容易に得難い人物であつた」と大塚を偲んでいる(『人道』一八三頁)。
- (43) 『同志社時報』六二二(一九一〇年一月二五日発行)。
- (44) 満鉄に関しては安藤彦太郎編『満鉄—日本帝国主義と中国』(一九六五、御茶の水書房)、『南満州鉄道株式会社十年史』(一九一九、南満州鉄道株式会社)、『南満州鉄道株式会社第二次十年史(上)』(一九七四、原書房)等参照。
- (45) 『南満州鉄道株式会社十年史』(一九一九、南満州鉄道株式会社)一四四—一四五頁。
- (46) 『人道』七三三(一九一一年五月一日)。
- (47) 『人道』一一〇号(一九一四年六月一日)。
- (48) 『大塚素遺稿』四八六～四八七頁。
- (49) 『斯民』一四一四(一九一九年四月一日)に大塚は「労働大学ともいふべき自動車会社」という講演と同名の論文を発表している。

(50) 『大塚素遺稿』一一一頁。

(51) 『大塚素遺稿』二二七〜二二八頁。この「壁書」には「右は満鉄見習寄宿舎の各室に掲げしものなり」という解説が付されている。

(52) 『大塚素遺稿』二二五〜二二六頁。

(53) 『大塚素遺稿』八二〜八三四頁。

(54) 『人道』一八三号(一九二〇年九月一日)。

(55) 『同志社時報』一七九号(一九二〇年一月一日)。

(56) この著書の上梓された顛末は以下の如くである。「大正九年十一月四日故人を追念せん為、故人の先輩知友は東京神田如水会館に其の追悼会を催しました。同会での話に何かの方法で故人を紀念することをしてはどうであらうと云ふことになりましたが、座中の牧野虎次君は起て申さるゝには、故人は筆に堪能でしたから詩歌文章がある筈です。之を編輯して友人間に頒つてはどうだらうとそこで江原素六翁は大塚君の如き人格者の遺風か我が青年の間に伝はることは最も願はしきことであるから両手を挙げて賛成することでした」(『大塚素遺稿』二〜三頁)と、そして高野重三が遺稿編輯その他の委員を委嘱したということである。